

## 2019年度(令和1年度)収支決算のご報告

収入の部		支出の部	
2019年度会費	720,000	マシ事業費	
寄附金	1,904,000	建設費・管理費・人件費	2,795,711
助成金(WF基金)	400,000	日本事業費	
販売収入		管理費・人件費・交通費	
講演会時・コンサート	1,028,650	広報費・その他関連費	1,203,671
預金利息	5	その他の経費	10,000
計	4,052,655	計	4,009,382
2018年度から繰り越し	593,720	次年度へ繰り越し	636,998
合計	4,646,375	合計	4,646,375

三菱UFJ銀行年度末残 168,767 円  
ゆうちょ銀行 年度末残 900,302 円  
年度末現金残 149,700 円

カラ西アフリカ農村自立協力会 2019年度(令和1年度)会計について  
正確かつ適正に処理されていることを確認いたしました。  
令和2年 6月15日 監査

神山明子  
滝口清子

## 2019年度(令和1年度)度事業の報告

### 日本国内での活動

- 4/21 日本歯科大学【Dmuse2019】に出展・活動紹介
- 5/19 【SI町田チャリティー横浜うかい亭での集い】で講演
- 5/25 明星大学にて講義
- 5/29 カラマシスタッフのラミンジャワラとオマールジャワラ来日(6/10帰国)。  
この間、カラ役員と面談、WF基金表敬訪問。京都精華大学サコ学長表敬訪問
- 9/8 【カラ講演会】日本歯科大学
- 9/19 JICS 事業報告会
- 9/29 SI国分寺25周年式典出席
- 9/30 【日本中近東アフリカ婦人会】のバザーに出展
- 12/1 カラコンサート「かけはし2019」開催
- 2020.1/21 「柔道マリ共和国代表Tokyo2020事前合宿覚書締結式」に出席。  
※この事業は村上が個人的にマリ柔道協会の委任を受けたものである。
- 2/29 盛岡へ、2020年度事業計画等の打ち合わせ。※盛岡市スポーツツーリズム推進室スタッフ、  
(一社)JCI盛岡メンバー

2020年12月に予定していたカラコンサート「かけはし2020」はコロナウイルス感染予防の為に中止いたします。

# 2019年度(令和1年度) カラ事業報告書



女性健康普及員(通称KMT)活動の説明を聞く人たち

カラ西アフリカ農村自立協力会 <http://ongcara.org/>

東京事務局  
〒177-0054  
東京都練馬区立野町7-9 クリオ吉祥寺壺番館101  
Tel:03-3929-5767  
E-mail: centre@ongcara.org

バマコ事務局  
BP E367 BAMAKO MALI  
Tel:223-2020-9096

ご注意ください:任意団体となり会の名称は「カラ西アフリカ農村自立協力会」となりました。



カラのマリ共和国に於ける支援事業について1993年から続けてご報告してまいりましたが、2019年にはとても大きなニュースが2件ありました。

### 2019年重大ニュース その1

現地の人たちへの支援事業は、村人たちの自立に合わせて殆どの事業が村に移管された旨を「2018年度事業報告書」にて申し上げました。しかし、新規開設の産院・診療所、女性センター、そしてタマネギ保存庫等の運営と管理についてはまだ不十分な点があるため、2019年12月までスタッフのアワカンサイとアシスタントスタッフ2人(ムーサ ジャラ、シャカ ジャラ)が指導してきました。が、彼らとの契約も2019年12月で終了となりました。

その後は、シラブレ村のムーサ ジャラだけを連絡係として改めて雇用しました。これまで30年近く続いていた日本本部への毎月の活動報告書の提出も終わりとなりました。必要に応じてこちらからメールで連絡を取り現状を尋ねております。これまでひと時も休むことなく続けたこの支援事業を、今後は**村の人たちがどのように生活に取り入れ、改善を伴いながら自分たちのものにするか**、が問われる段階に入りました。たとえ問題が発生し解決に困っても彼ら自身で解決することが望まれますし、私たちはそう願ってまいります。

2020年度以後の事業予定は、識字教室建設の支援等に限って日本側から支援します。

そして、マリ人事務所スタッフ(ラミン ジャワラとオマール ジャワラ)が主体となって新規に5ヶ年計画で環境保全事業を始める予定です。この事業は、彼らからの申し出により東京本部が役員会で相談の上で了解しました。

このカラ・マリが主体となる事業の費用の申請をUNDPに出していますが、新型コロナウイルス感染状況が落ち着いたら、承諾を得て事業が開始されるということです。



岩手県立盛岡二高生美術部制作による「今までのマリ、これからのマリ」

### 2019年重大ニュース その2

2017年5月、岩手県盛岡市が、「TOKYO2020」に向けてアフリカの何処かの国のホストタウンとしての支援を考えていることを伝え聞きました。カラはマリ共和国で30年近く支援事業を続け沢山の現地の人たちと仲良くなり日々助け合ってきましたので、これを機にマリに何かお礼を、と考え「マリ共和国のホストタウンになっていただけないか?」とお願いしてみました。マリ共和国はこれまでのオリンピックに参加したのは柔道だけでしたので、今回も柔道選手に限り、ということで事前合宿受け入れを検討して下さいました。

そしてカラの願いが叶い、盛岡市がホストタウンになって下さるという嬉しいお返事を頂きました。これには公的な手続きが必要で、盛岡市の依頼を受けマリ大使館、関係庁への説明に同行し認定までのお手伝いをさせていただきます。そして、村上がマリ柔道連盟から委任を受け2020年1月21日の「柔道マリ共和国代表

## ホットニュース

### マリの現在の政情と新型コロナウイルス感染について

2020年7月10日マリ共和国の首都バマコ市では、現大統領辞任を目的とする大規模なデモが発生し、何千という人たちが革命広場を埋め尽くしました。

2012年3月発生デモ以来の大規模なものでした。デモ参加者の一部は、公的施設の破壊や商店の破壊・略奪行為、路上のバリケートのタイヤに火をつける始末で、町中は非常に危険な状況でした。この日までに死者12名、負傷者127名と発表されています。市内を二分するニジュール河に架かる3本の長い橋は閉鎖され(一時的に開放されることもあるようです)、国会議事堂、ORTM((国営ラジオTV局)が破壊され、憲法裁判所の裁判官・閣僚は辞任し。大統領だけが残るも無政府状態ということです。この10日のデモに至るまでには何度となく騒乱が生じています。国民の生活環境の悪化を顧みずに、大統領一家、親族、側近への優遇、不正な選挙、不正な裁判、そして未だ収束の見えないイスラム過激派武装勢力による北部紛争、モプチ地域での村人の殺戮、その他多くの不正を解決しないことへの不満に加え、新型コロナウイルスの感染も拡大しています。

先進国同様にマスクをかけ3密にならないよう注意していますが「敬虔なイスラム教徒はコロナウイルスは感染しない」と信じる多くの人がマスクで礼拝しています。ほとんどの人々は「仕事をしなければ食べ物を買えない、死んでしまう」と言い、とても自粛できる状況ではありません。国の状況はそれぞれ異なりますからアフリカの最貧国と言われている国の人々に、感染予防のため自粛を勧めても、国から何の生活保証のない状況では、生きる為の仕事の中止することは出来ません。この状況では3密は全く守れません。

7月10日のデモでの要求を聞き入れない大統領に対し、7月17日にも再度デモを予定していましたが、取り止めになりました。これを解決に導くために西アフリカ諸国経済共同体(cedeao(仏)、ecowas(英))の代表がマリを訪れ、反政府派の多くの代表と交渉しましたが失敗に終わりました。次いでマリ周囲の6ヶ国の大統領がマリに来て反政府軍と話し合うことになりました。その結果、またデモを行うこともありうるということですが、7月31日(金曜日)のタバスキ(イスラム教の最大で重要な祭日・ラマダン終了後60日目にあたります)が終了するまでデモは行わないということになっているそうです。

TVで女性の代表が母親の立場から「子供の学校が1月から閉鎖されたままである、病気に対しても何の策も取られていない」と訴える姿が印象的でした。この一連のデモによって命を落とした人の哀悼の為に、革命広場を埋め尽くす、肩をひしめくようにして地面に膝をつけて祈る人々の姿を映像で観ました。マリ共和国の人々はコロナウイルスに感染する危険を知っていながらも、それでも神に祈りを捧げる姿に、現在最も悲惨な状況にありながらも信念を貫こうとするひたむきさをせつなく感じました。早くこの状況から脱する事を望みますが、社会のリーダーの資質によってその国全体が大きく左右されることを改めて感じています。

この情報の大部分はカラのマリスタッフから写真と共に連日東京に寄せられた7月25日までの情報です。



デモの日、カラマリ事務所の近くの状況  
カラスタッフ・事務所は被害をうけませんでした。撮影：カラスタッフ



保健事業について

もっとも目覚ましい発展は産院・診療所の運営管理でした。村の人たちにとっては、貧しく質素な施設でも待ちに待ったものです。そして専門的知識を学んだ村人が村の仲間を診る・出産介助をする事は、心強く安心と勇気を与えています。

2019年5月15日に新規にドゴニ村産院・診療所の開院式がおこなわれました。開設後の管理運営はすべて村の管理委員会が行い、産院・診療所の収入ですべてを賄っています。赤字の月には村で工面しています。

カラが開設したコニナ地域の7ヶ所、ダウンバ地域の4ヶ所のすべての産院・診療所は自力で運営しています。

そして、おばさんたちの指導する「衛生知識と病気予防の学習会」によって学び実践して来た経験が、今まで両親の悩みであった子供たちの病気を家庭内で予防し、早期に治療できるようになりました。



ドゴニ村産院開設の日、バラフォンに合わせて踊る女性たち。



新規開設ドゴニ村産院スタッフ

小・中学校開設のその後

カラが建設した学校では小・中ともに就学生徒数が増え、特に小学校では女子生徒数が増えました。嬉しいことです。一部の学校の状況は次の様でした。

- 小学校(1年生から6年生まで)の生徒数
- 2018年10月→2019年9月
- 就学児童数292名(男児145名/女児147名)
- 2019年10月→2020年9月
- 就学児童数354名(男児150名/女児204名)
- 中学校(7年生から9年生まで)の生徒数
- 2018年10月→2019年9月
- 就学児童数157名(男児92名/女児65名)
- 2019年10月→2020年9月
- 就学児童数186名(男児104名/女児82名)



開設されたファニ ネグタブグー女性センターの識字教師(左)と女性代表(右)

マリでは入学式が10月1日、学年終了が翌年の6月末、その後は長い夏休みに入ります。しかし多くの農村部では、雨期の降雨状況により学校への出席も左右され、雨が早くから降り始めると高学年の子供から農作業に駆り出され、授業を休むようになります。そのため学年終了(6月)ぎりぎりまで通学できるのは低学年だけに

なります。

しかし残念なことに2020年は教師のストライキにより学校は1月から休講です。マリ国内の政情に不満を持った反政府軍の引き起こすデモやストライキ、また北部紛争の激化で多くの死亡者が出たことから、生徒たちを兵士にしようとする動きがあることです。

もし、学童兵士が派遣されるようになったら最悪な事態です。マリのスタッフたちは、もうマリには未来はないのだろうか? と言います。この国を彼らの力で発展させようと頑張っている若者が多くいるのも確かです。国民の訴えに耳を傾けてくれることを祈っています。



小学校の女児生徒たち(写真右側)。

識字学習の発展とその他の事業について

現在は、この識字学習については女性専用の学習会のようになっていました。過去には全く考えられなかったことです。

通常「おんなは太っていて子供をたくさん産み、よく働く」、これが女性のベストの人生と言われ、女性も男性もそのように考えていましたが、今は違います。識字教室へは女性だけが集まって来るようになりました。指導者を頼み、少ないながらも謝金を支払い、1週間に2日、定期的に午後から夕方まで学習しています。この努力が自信につながり、教育の必要性を強く意識するようになりました。以前は長男を優先的に小学校へ就学させていましたが、最近は女兒も就学させるように変化してきました。

マリ共和国で識字学習を奨励し始めた当時は、女性(妻)の夜間の外出を許さない男性(夫)が多かったため、夜間に行う授業の女性の出席率は低く、また男女同じ教室を使用するのを嫌がる傾向もあったため、生徒はほとんど男性でした。そして女性たちは、日中の農作業や家事が多忙で時間的な余裕がなかったのも原因だったと思います。識字教室に来る女性たちは本当に少数で、常に同じ女性たちでした。彼女たちは小学校がある村出身であれば(2~3年生くらいまででしたが)就学経験がありました。しかし全く就学経験のない女性たちにとっては、腰が引けたのでしょ。

そして面白いことに、小学校がない村出身の字を書けない若い主婦たちは出席することはなく、来るのは殆どが中年以上の女性たちでした。若い人と比較するとなかなか覚えられずいつも同じことを学んでいたのが印象的でした。

男性クラスでは、逆に少年の出席率が高かったです。特に印象に残っているのは、文字を全く知らなかった少年が数字を覚え、母親に市場で腕時計を買ってもらい、時間の読み方を練習していたことや、カラのスタッフたちが教育の必要性を痛感し、妹や弟を隣村の小学校にまで通学させるようになったことでした。マリ共和国が識字教師育成を開始した1990年から約30年経過した今、やっと女性が自覚して学び始めたといってもいいと思います。かつては自己を主張できず、村でも家庭でも弱い立場であった女性たちが、自らの力で収入を得るようになったこと、衛生・病気予防の学習会などを行い村の社会で認められるようになったこと、このような事情を経て、現在は女性がメインの識字教室を開催する村が多くなってきました。女性たちにとってはこれからがスタートです、このような母親たちに育てられた子供の未来が楽しみです。



村の青年たちに「カラの活動で一番良かったことは？」という聞くと、彼らは「文字を覚えたこと」と言いました。現在は女生徒ばかりとなってしまった識字教室は、かつてはカラのアシスタントスタッフであったり、教師育成研修会で育った男性たちが教師を務めています。

マリ共和国では、文字が書けず読む事もできない、そして計算もできない人が非常に多いのです。私の記憶では1990年頃にマリ共和国識字教育振興庁が識字率向上のため、少しの期間でも就学経験のある村の男女に識字教師育成研修会を開始しました。当時マディナ村に滞在していた私も研修会に参加しました。この研修の目的は、受講した人を識字教師として育成し、彼らの言葉(部族語)の文字の読み書きと、簡単な算数を村の人々に教えられるようにすることでした。しかしその後クーデターの発生などにより計画は着実に進んだわけではありません。しかし1995年頃には、識字学習普及の日が制定され、その日には学習に熱心な村が表彰され、ご褒美を貰えました。その事も人々に学習を意識させる大きな動議づけになったようでした。

カラは活動地域の約100ヶ村の識字学習の普及を担当するように言われ、教室の無い村に教室を建設しました。またカラは独自で数年もの間、村の識字教師育成を目的とした2週間にわたる研修会を、バマコ市の識字教育振興庁から招いた専門家とともに、各村から選出された代表2人(男性、女性各1人)に対して実施しました。このプロジェクトには多額の経費が必要でした。参加者全員に1日3食を提供し、遠方の村から来る人、子供を背負ってくる女性たちにはカラの宿舎を提供しました。彼らは招待客という意識で来るため、全く何も持って来ないので、洗面用具なども全てカラで備えました。これがこの地域の習慣だと言うことで、なかなか意識を変えることも出来ませんでした。しかし現在、このようにして生まれた識字教師たちは、村の指導者となっています。さらには勉強して小学校の教師になった人さえもいます。

2019年に新築されたシンザニ村識字教室の写真を、紙上でお目にかけることが出来ないのは非常に残念です。完成した教室の看板を取り付けに行った際に撮影する予定が、新型コロナウイルスの感染拡大のために、人々の村への往来が禁止されたのです。この状態は現在も続いています。しかしファネグタブグー村女性センターは、シンザニ村識字教室よりも先に完成していたため、撮影ができました。バブグ村に建設したタマネギ保存庫も同様です。

このファネグタブグー村女性センターは、識字教室としても、女性適正技術の習得場としても有効に使用されています。ここから生み出される収入が女性貸付事業の原資とされ、少しずつ蓄えられた資金で貸付事業が始まりました。

このように村の女性たちはカラがいなくてもたくましい底力を発揮してきました。

しかし問題は、まだ識字教室の無い村があるということです。これらの村に識字教室を建設することを今後の日本からの支援事業としました。先に書きましたように盛岡青年会議所さんが識字教室の建設を支援して下さることは、非常にうれしいことであり、とても感謝しております。



識字教室で学ぶ女性たち

Tokyo2020事前合宿覚書締結式」にマリ側として出席しました。

事前合宿中とその準備には、旧カラスタッフの大久保順代さん、(特活)サヘルの森の榎本肇さん、村上の3人態勢でお世話をする事になりました。

その後はみなさまご存じのように、新型コロナウイルスの感染が世界中を駆け巡っており、「TOKYO2020」は2021年に延期されました。カラでは、盛岡市や岩手県の皆さんへ発展途上国のマリ共和国についての啓発も考え、種々イベントを計画しておりましたが、残念なことに全てを中止しました。しかし私共3人の任務は「TOKYO2020」の延期に伴い2021年7月まで継続されます。

思いがけなく、盛岡市がホストタウンとなって下さったのを機に、発展途上国の人々の状況を目になされた時に哀れみの感情だけでなく、その事情を正しく理解し我々の生活を振り返り、世界の貧困や格差、意識の偏見が無くなるように努めることが私たちの仕事と思います。さらに詳しい内容は是非カラHPをご覧ください。

## 2019年重大ニュース その他

盛岡市がマリ共和国のホストタウンになって下さったことは、次の様なことに発展しました。最初は、2019年度ジャパンアートマイル主催「東京2020オリンピック・パラリンピック参加予定国・地域の子ども達と協創する未来」に於いて、岩手県立盛岡第二高等学校の美術部の方々が「今までのマリ、これからのマリ」というテーマで世界遺産のトゥンブクトゥーやドゴン族をモチーフにして、女性の社会参画に進む姿と緑を増やしたいという願いを表現した壁画を制作しました。この壁画は、東京オリンピックパラリンピック競技大会組織委員会が主催するイベント「東京2020 NIPPONフェスティバル」の中の「わっさい Wassai」で展示される予定でしたが、イベントは中止となりました。

次いで、盛岡市からカラの活動地域の小学生たちに「いわて盛岡シティーマラソン2019」のTシャツが寄付されました。そして(一社)盛岡青年会議所さんが中心となり、盛岡市民の皆様と共にカラの事業地域に識字教室を1教室建設して下さいになりました。

ご興味のある方は、(一社)盛岡青年会議所広報誌「Values(ヴァリューズ)」2020年6月29日号をご覧ください。スペシャルトークに宮野理事長と村上代表の対談が掲載されています。広報誌は(一社)盛岡青年会議所公式ホームページ(<https://www.moriokajc.org>)からご覧になれます。

以上のように、現在は新型コロナウイルス感染の危険に伴い渡航の出来ない状況ではありますが、日本国内で思いがけなく多くの事が生じた年度でした。



盛岡市役所に掲げられた「柔道 マリ共和国 ホストタウン」の横断幕